



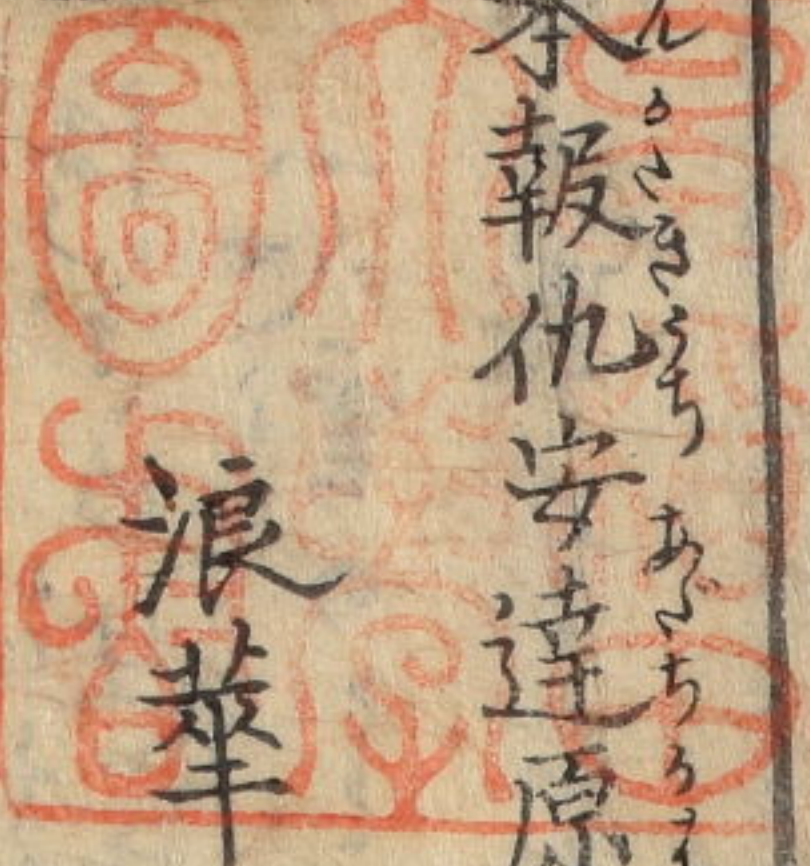
繪本報仇安達原

^ 13  
2890  
2





繪本報仇安達原冊之二



第二編

箕山 門人

文亭主人著 辭元齋叟校

昭和九年七月九日 晴末

清水おもひやり〜横死す  
傳蔵ゆくりなく〜獲甦り

山川傳蔵ハ八雲の媒よて廿一日の夜を待君よりみ其日

みかれハ今夕逢〜の嬉〜黄氏口びまち

晚鐘の音の耳みまま〜せられバ猶もあろ解よ

夜よかがぐくおほへりり。さりを初更の時く川り人さ之る

きがももを折よく潜んと刀を握回る真世の

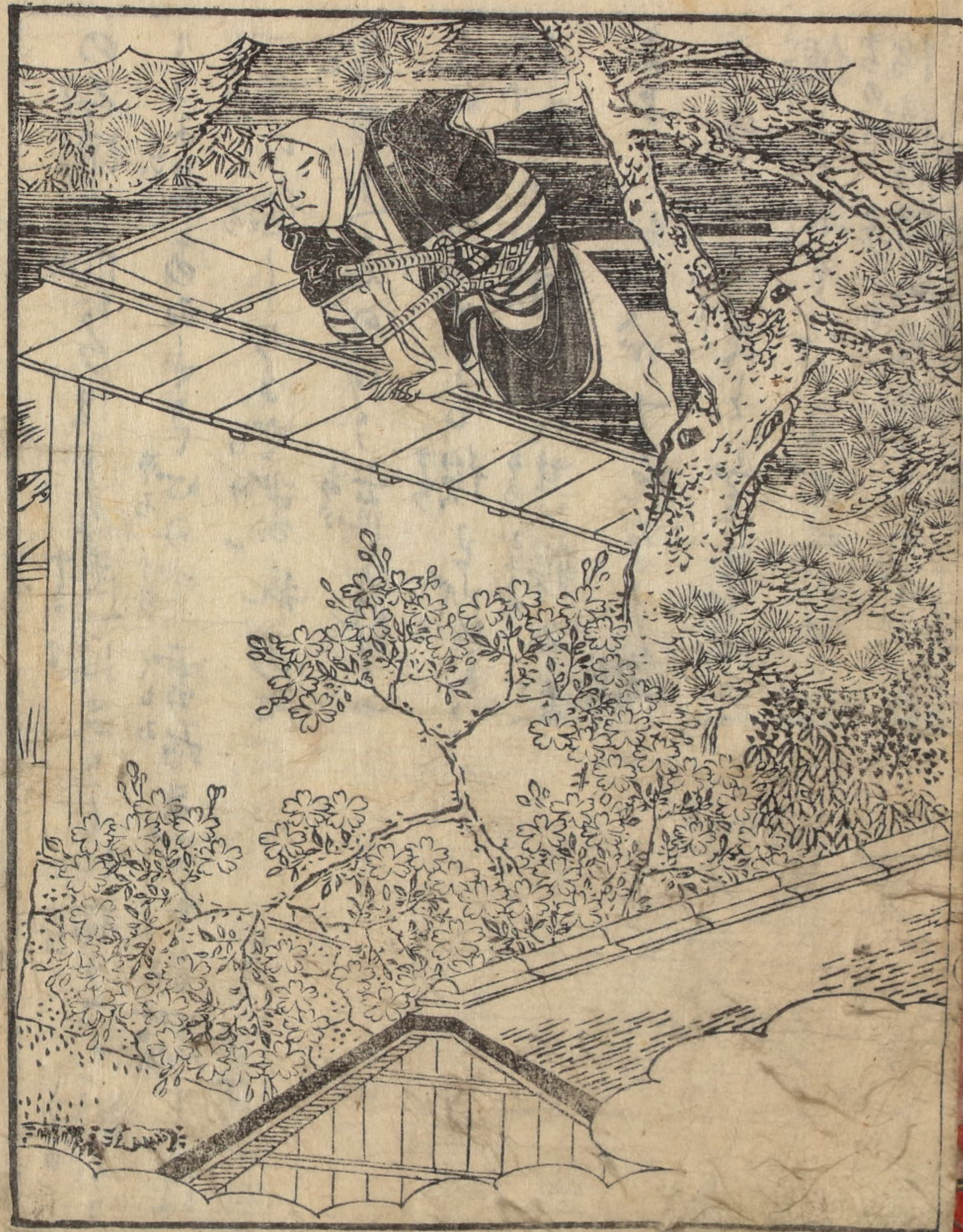
西の島を渡る舟二

遅しとて心も臆し安部の竹芽より早き門のうら  
たすく入るも看ざりしに又も之心を碎きおもへら  
く。この表門なれど入としても思なす小波の井を待  
つ。い必を東の方なるべし。透たり八雲よ此妻をま  
おくべきや。餘のこれしよ。も。と忘たるし。の残念  
さぞかしな小波の待とびんと。い。心。も。東のか  
なく廻りみま。看あが。けの高屏あり。其上よ  
り松檜の生茂あれ。是こそ小波の局の透たる  
べし。よ八雲のこ。ば。千載の。げ。待。と。云し  
が。の。事。なり。な。を。摺。おもひ。こ。づ。ひ。す。彼高屏

の石垣も仇ならほどの透間あり。に。指。り。て。踏。り  
ら。よ。最。あ。お。こ。心。の。中。雲。若。ま。で。思。は  
一念の徹し。る。で。蒙。疵。あ。ま。ち。も。な。く。て。斬。り  
屍の。る。る。の。け。荒。れ。之。と。向。上。の。を。と。馳  
これ。小。波。の。も。後。と。び。し。る。躰。ま。て。彼。所。の。透  
千。若。たり。傳。蔵。其。躰。の。看。る。約。も。た。り。待  
る。よ。し。お。も。へ。か。や。ん。な。く。胸。を。ま。り。て。見。し。ふ。し  
み。あ。と。大。変。と。ふ。と。ご。め。と。う。し。て。透。へ。下。ん。と  
便。と。ま。あ。それ。が。な。ま。れ。が。な。と。想。う。ち。あ。ろ。ろ。つ。ま。く  
柵。樹。の。條。の。な。れ。と。あ。れ。い。これ。も。執。つ。下。り。看。じ

林たちのなをり冊二

二



と彼宗は身とをいしとそく。脊をのむく。一箇一技をも  
礎ともち。此方の屏とふとをもち。彼の山水の岩た  
らくあれば。それへ是と踏べしとて。浮と跳下し。み。  
如何なるも。とぐとみして。持たる枝を放せし。を傳藏の山  
水のや。こも。大石の居ありし。其の間。またて。よ。山を  
なせし。殿の後へ。上。洛。たちまち。抱死をぞ。な。たり。  
是下。み。小波の待。待。君。し。み。傳藏が。下。み。し。故。死  
なる。と。看。く。噫。と。おも。ひ。し。が。其。の。息。の。だ。まり。り。  
斯。く。二。人。と。も。氣。絶。して。あり。し。う。ど。も。家。内。の。もの  
た。れ。ひ。と。り。と。ふ。ざ。れ。ば。其。の。夜。い。何。事。も。な。く。て。結。朝

子及んぐ。惟之登。厠。み。行。んと。して。庭。の。と。び。り。と。傳。ひ  
あゆ。も。し。に。向。ふ。の。庭。は。人。ふ。し。見。る。ゆ。く。不。実。田。お。も  
ひ。除。り。し。れ。い。美。女。小。波。を。り。ま。れ。ば。慌。て。致。す。て。つ。ぶ。き。お  
こ。し。声。と。お。ぎ。う。り。み。呼。り。れ。ば。是。の。お。と。し。お。と。し。て。家。内。の  
もの。皆。来。り。し。る。女。房。祐。衛。も。こ。も。み。介。抱。し。気。つ。け。水。ふ  
き。り。れ。ば。も。緯。函。し。れ。ば。是。非。か。き。こ。な。り。夫。婦。の。もの  
の。哭。か。る。し。こ。い。う。な。る。と。と。ん。斯。く。庭。の。い。づ。く。死。た。る。と。も。  
の。ろ。く。口。説。た。く。悔。り。れ。ば。婦。女。の。もの。見。つ。け。ぬ。し。彼。も。七  
上。死。骸。と。し。ふ。子。致。す。よ。り。し。れ。ば。男。子。俯。し。て。仕。さ。り  
お。も。て。い。山。石。は。敷。手。き。血。も。も。び。き。た。れ。ば。誰。と。も。人。の。あ。ま



より仁心の男かれ川。山川と。うらむるの心なく二人の後  
 怨やいとも。厚子僧は供養をばな〜り。此支ひと  
 ち〜〜ど。思ひ〜壁聴石言の世のな〜ひかれ  
 忙くも軀八雲が耳よ入りれば。八雲つ〜おも〜ら〜  
 さてい昔小波子物せ〜更も徒とゆ〜二人とも  
 上果〜れば我手よ金の入べき緒〜。あ〜功あ〜の  
 空〜く〜や〜ら〜よと。強欲非道のま〜ら〜ら〜悔の  
 うらよ思へらくあられ二人のもの。棺のうち床〜。七  
 のも有る人と一夜中宿よ彼サ葺〜山よ行〜  
 こと。探〜ま〜が。うら〜の丘の深〜水の流〜

子少〜率堵婆の建あられ。あよ相違あ〜〜ど。用  
 意せ〜鏝めて埋あり〜棺とあり〜。堅横〜絡  
 る。理と斬〜。蓋〜板と取〜れば小波と傳蔵が  
 死骸その夕みて收めり。よく〜れば小波が〜ら〜  
 金銀の釵たまの櫛は瑠玳の文鏝〜な〜あ〜  
 案よたがら〜望王〜ころよ〜と。悉く大集〜。又傳蔵が  
 衣服帯もめ。ま〜剥〜一箇のふら〜き〜  
 れと替目負て足とを〜めて飯〜。斯〜山川傳蔵  
 死〜黄土よ赴〜。軀八雲が強欲より棺と掘〜  
 衣服〜る剥〜り〜。あ〜。夜陰の身よ〜〜唇と〜





せしと。さるるは冷気とおぼく不斗目と用さるれば樹  
 木生りたりたる谷間水漲々として流る音は且風の  
 木葉と吹おとすに。あは何如なる所かえんと人びらちと  
 たり。あざりと看ば小波も躰の躰をばよありて一箇の  
 櫓も入れば。さては是夕れば安部の聲よ。さびりり  
 高岸と踏越松の支と相まぐり。嘯とおもひり  
 そののちい。おぼくか。おまへらく音に死たるる。あは  
 冥途の旅路なる也。側の骸はむらひ。小波くと呼  
 起ども更も應せず。又おまひるる。小波いうまゝして  
 音と一ふよあるし。の不思議さよと種々思ひ

ありしに。をま五更の此糸雲あまはれ。一天あうくなり  
 りれば傳蔵に死す。後甦しとてさる。躰と棺と  
 岸渡り出づ。川の流とくも。嘯ればいよく。息も夫  
 夫もおぼく。小波も水と与へ吞せ。呼りれば  
 既も死すれば。甦るけしきも看す。斯くある  
 べくもあまね。傳蔵の後の棺も出と西復く。我身  
 録倉よかつるも。面耻羞田おもひれば。まよひ  
 艱難を怪す。陸奥州へ赴き。りり。  
 去りども安部家。あは養女。小波の濱も去り。不慮  
 死せし。安部家内。のものよ。告言固言。せり。り。れども





昔も女鬼のどく。おとろへ念仏の声よつて  
唱へると。其まへすては教死り。斯く夢ともま  
幻ともれ。年記十五六とおぼく。最婢奸  
女子の紅顔瘦つれ。髪は櫛もたれ。白  
衣を着る。細き清まる手と合くつて。毒  
君とふくく。云かきせ。小波の魂なり。斗ぢも君と  
往せ。赴く。欲ふる。八雲が捲てあむ。夢二人  
の衣帯とぶひより。兩路の浸り。君が唇は濡  
ぬり。ゆき。死てふ。君と同く。口  
七執の止た。三熱の苦。斯まで身細かりたる

よと泪と潜々と流し。傳蔵が顔と直視より  
し。又ふや。玉躰の秋。あげれる中。送て飢渴  
は遭ふ。いと。未。命。殺の盡され。死。あ  
く。餘。君の辛。て。おい。す。食。と。糸。す。と  
秋の虫と取て傳蔵が口に入。や。おもひ。は。猿  
と。く。波。が。容。え。ず。忽。ち。夢。の。さ。め。る。心。地。よ。て  
ゆめう。とおも。つ。夢。の。あ。ら。が。口。中。は。糸。あり。ね。と  
し。これ。は。小。虫。あり。れ。れ。あ。ら。不。思。行。の。故。り。は  
お。し。し。よ。と。や。狗。下。の。水。動。く。得。急。お。ぼ。く。れ。し  
何の沈思もなく。そのむ。二つ。三つ。啖。て。嚙。も。れ。れ。

夢の物語の巻二

〇十一





ともがらべしとて。厚く是舎に謝を述べて遂に  
陸奥のさへ一行する。されば奥州福島の大守  
藤原景高侯永保元年台後を助かりて近州  
の大寺と船焼よりをいふ山門の悪僧漂泊し  
て多し此福島より踵其仇を報いんと云ふ。臨  
盗あざれもの若し人民をのそよしり。すつみ  
早川兵庫とソレ。武士武術丹孫の人を側  
筆道又妙と得てありれば。是れは太守の殿  
余も因て子息景次公も空海の筆法を傳授し  
そのかつとて。山門のあふれものふて徘徊すに偶

出合この世武懐中あつらふんと七八人言を  
いよ四隅より立鬼と懸る引伸く名兵庫ハ  
思ひ多し虫交なれども透す刀を被るる切て  
薙るを打おとされ多れは無勢なるにねむ是と  
かき彼こととたれ。遂に衣被も剥きられく一大事と  
おもふ海流の法帖すこも引破り剣へ墨リつ子彼那  
標ぬけしは活ら乱せよ立座ながる。軍法を學ぶして  
人の姓名を記むるの法帖をあつらふとあくる疾人  
ものよと云ふま。首回を撰地と打たりれば。なご  
る鮮血も目くらま。這まいると側活田へ若く

あつらふての丹二

二〇

踏んで比白く打笑て退まり。後早川兵庫の沼  
田に仕を泥土まびきし。百回の大疵は水とて  
つゝ苦しく叫びたる折る山川傳蔵は奥州に落  
行が路にてあつと通る苦しげに人の叫を聞て  
何もの仕業あるぞ扶け上べと思へる。夜陰の  
とかれは明もなくと其まお通りぬる路二里  
も行通し。傳蔵つゝおもひる。人として人此  
艱難もあると見捨れ丈夫にあふ隙と忙に墮と  
及し。彼亦戻りしれは。かとも傷く悲あり。松  
声りけてつふ。筆の鎌倉の士の山川傳蔵とりふ

ものなり。茲を通りかく。苦き声を聞て見過る子  
潜む。救ひ上べと言さ。沼田に跳入。抱おこし。渾  
々と大道へあがり。抱て。時ふ。早川が同僚山岩瀬  
軍内郷中よりかゝる。焼灯つゝ。未かく。是を  
看る。大におどろき。其方早川兵庫なる。之は  
形勢如何かと呼まれ。兵庫面目なげに涙を流  
し。苦しき息をつぎ。云る。某今日君を命に  
空海の筆道と告あげ。つゝ。不意大勢の  
み出合。是ていたる。口惜と云。死し息た。る  
軍内あり。教る。家僕水とす。と名。忙し。噓り

あつとつゝの山川傳蔵  
一〇二





けらればあがりの中は、甦ぐまども、何のさかもつらふは。  
 多る宿へ人馳しむどせしに、傳蔵つらく、岩原と看  
 川義時子仕へし看友なり。あま石思儀の邂逅と  
 思の燃灯の明も顔さし出し、岩原公まで、いかささと  
 軍内おどろひし看。山川傳蔵も、偶何如  
 なる奇稲ぞと送し昔を思ひ出し、足下何ゆ人、看ま  
 ありしところ、山川身も形も早きを耻し、あま定  
 ぢ怪しくおぼしめされん。武士もあり、ながも、世帯  
 もれく。形勢も落魄し、しと語も言ながり、品今  
 是地と通り、りよ、誰か若痛の声せし、うども、夜中

のしりれば、お過せしにつらく、おちふも、人の艱苦と  
 見、救ざるは、丈夫も非と、早ち引返し、直子田、此  
 入し抱へ、あがりし、足下の来し、うると、未曲も、信  
 岩原も、山川が、厚子、道を感じ、能も、技られしと、梅  
 同僚、早川も、代し、謝を、述べ、斯ありし、が、先も、早  
 川が、宿所へ、馳し、しよ、忙が、及ると、ヨ、早で、送、々も、人、未  
 り、れ、兵、庫を、轎子も、技入、除も、送、後、  
 岩原、軍内、諸事も、心と、な、り、又、山川、  
 家へ、か、り、り、さ、り、や、薩も、好、事、門を、出、  
 千里と、走ると、い、宜、なり、る、昨夜、早川、  
 根、結、

會あひ見み眉まゆ見み疵きずとと紫むらりり刺さへへ沼ぬま田たはは陶たかここままれれ自じ心しん  
七なな抱かかべべ手て打うち擲なはは遭あひひるるどど人ひとのの風かぜ説せききくくたたれればば疾はや  
もも大だい守しゅのの聞きここええ達たつ一いつ遂つひはは早はや川が兵へい庫こ浪なみ人ひとのの身みととな  
りりとと據よりり外ぐわい祖そ徒と丈ぢょうのの方かたへへ引ひ取とりり  
去さ不ふどどにに山さん川が信しん藏ざうのの思おもひひががケケケケ怒ど不ふままてて山さん原げん軍ぐん  
内うちはは值ち偶ぐ丈ぢょうよりより同どう左さへへ山さん原げんがが宅たくへへ行ゆむむりり  
治ちのの盡つぬぬおももひひとと述の相さう送そうはは打うちららるるがが撞つをを報へん  
苦くはは遭あひひ説せ話わはは軍ぐん内うちもも舊きう旧きう友ゆうののよよししをを止とめめししぬぬくく  
おももひひ遂つひはは團だんくく世せ話わののけけけけいいづづ傳でん蔵ざうもも大だい  
かかとと得えててああれればばここれれはは身みをを托たくくくおおききとと思おもひひすす

ありありららるるがが傳でん蔵ざうはは吾わ藝ぎ馬ば術じゆつをを以もつつ大だい守しゅははもも仕し  
べべとと昼ちゆう夜やおももひひををここめめ毎まい日じつはは山さん原げん一いつ倍ばいりりすす  
何なに卒そつ足そく下げのの執しやく持ぢをを吾わ御ご護ごのの不ふどど大だい守しゅはは吾わ  
一いつ昔せき鳥とりめめののいいづづ上じやう辱じやくししもも執しやく立た装さうるるやや呼よびびしし  
撞つをを頼たの君きみ一いつがが山さん原げんのの素す馬ば實じつのの人ひとななれればば傳でん蔵ざう  
がが懐くわい心しんををととりりててああれればば惟ただ聞きななががすすののををおおひひてて其そのことこと  
おおももくく徒たはは日じつをを怪あやしし月げつ満まんとと一いつ年ねん有ありり余ありり傳でん蔵ざうはは  
空くうへへ食じき客かくととかかららとと悔くわいををりり又また淮わいありりてて山さん川が  
馬ば術じゆつをを稱せうすすももののれれくく光こう陰いんをを送そうりりれればば心しんははよよ  
かからら次つぎおももひひ士し三さん月げつ仕しざざれればば事ことををおおももひひすすととああれればば

男おとこ子の耻はにかべきなりしと或ある夜よ山やま岩いわ隈かが秘ひ蔵くらせし懐くわい劍けんを盗ぬすむの布ぬす々々許ゆる多たの金かね子こを奪うばへし行ゆ方かたとて此こゝ山やま岩いわ瀬せ何なにの気きもつらうありし夜よあ  
けし山川さんげん家いへ子こあふふれば不ふ審しんおもひ又また出い庫くらの扉かど  
明あてあれは曲まが変へなると發おこるる忙いそぎ家いへ財ざいを吟げん味み  
すれば金かね子こも矢や口くち篋けいの緒いとも解とけ懐くわい劍けんもみずれば  
いで盜ぬす賊ぞくの所ところ為なるんと美み手てを握にぎり齒はを切きしに  
されと傳つた前まへ家いへもあふされれば彼かれもて有あらんうよも也  
舊ふる友ともの後のちもがうし事ことあるよくと心こゝろ踏ふ踏ふせし  
よ其その日ひ過すても飯いざれはよく彼かれ奴やつも定さだたし悪あくき

狼ろ心こゝろの恩おんもろげめ長なが命いのちを其そのますよおくべきうと家いへ  
隸げのことも西にしよ東ひがしと返かへりし遠とほく北きた延のびれば遂つひ  
に囚とら獲ととあふこげ茲いまも早はや川がわ兵へい庫くらの山やま門かどの悪あく徒と  
も出い會あひ思おもはがり子こ打うち擲なと蒙まり疾はやも主人しゅじん景かげ高たか公こう  
のまこくは達とつし遂つひに秩ちつ録ろく没ぼつ收しゆの身みとるりて  
小こ秋あきが親おや健けん丈ぢやうとしる方かたも引ひ取とりありらるるも也  
かくおくはありとても再またび瘡かさ仕しも遂つひに吉きち  
面目めんもくも失うれれば是こゝろより武ぶ者しや修しゆ行ぎやうも出いで  
も了しすべしと女によ房ぶどうの秋あきもも吹ふきしに小こ秋あき  
よ丈だけは思おもはがりおぼしめし相あ違ちがふらん又また也

高七十四歳たかになればはあれはは家督相續けとくのしとして  
つけららずで願ねがひを追おうと貴人申言あひをあづくる程ほど  
あらんで早はやに君惠めぐみと待たまへと。ソレらくらいるまじめ修しゆけを  
武者修行むしやうしゆぎやうの事止とぬと女をらの別わかれがくらいの金かね銀ぎんの  
口くち後ごたててく停とめらるも一いつ端たんおもひますと金かね銀ぎんの  
兵庫ひやうごにいればは是こゝに非死しにつくさすべしと。留とどめ徒  
丈ぢやう一いち示し後ごよらびければ健けん丈ぢやうも止がらずともしるり。  
こも進すすめられば躰たてて啟おのけ行ゆくの装まつりを調りり

繪本報仇安達原冊之二 畢



